

言語調査における問題について

——ガーナでの言語調査の経験から

古 閑 恭 子

1. はじめに

言語研究の多くが、研究者自身が言語調査で得た資料に基づいている。その中で、資料は分析、分類され、整然とした形で提示される。一方、どのように資料が得られたのか、そのためにどのような調査がなされたのか、ましてや調査過程で起こった問題などについて、論文や研究発表などで共有されることはまずない。本稿は、この、論文や研究報告には基本的に現れない事柄を取り上げる。

言語調査と言っても、その目的に応じてさまざまな方法がある。文献に現れる言語資料の調査もあれば、フィールドワークによる言語調査もある。さらに後者には言語の地理的変種を調べる地理言語学的調査や、同一の言語社会内での社会的変種を調べる社会言語学的調査などがある（江川 1985）。本稿で取り上げるのは、フィールドワークによる言語調査の中でも、未知の言語の調査である。未知の言語の調査とは、未調査の（あるいは調査不十分な）言語を自分で初めから調査するものである。世界には一説によると7000以上もの言語があり、その多くが今でもほとんどあるいはまったく調査されていない。一方で多くの言語が消滅の危機に瀕している。未調査言語の調査と分析は、言語学の中心的テーマの一つである（湯川 1999: 1）。

本稿では、言語調査における2つの問題を扱う。一つは、未知の言語の調査そのものに伴う困難という問題である。言語調査はその言語についてほとんどあるいは何も分からないところからスタートする。かつ、その言語は独自の豊かな構造を持っており、別の言語の枠組みや知識で理解することはできない。ではどのように対象言語の重要事項を引き出すのか。もう一つは、社会言語学的な問題、言い換えると言語内部の地域、社会方言的差異の問題である。調査は基本的に一人の母語話者を相手に行う。この人は、調査対象言語の「純粋」な母語話者である必要がある。方言的要素が混じっていると分析に支障が出るためである。しかし、母語話者は「純粋」な話者と言えるだろうか。そもそも「純粋」な話者などありえるだろうか。

この問題意識は、私自身が言語調査を行う中で抱えてきたものである。私は1999年以来これまで、計8回（各回1か月弱の滞在）の西アフリカ、ガーナでのフィールドワークで、アカン語（Akan: ニジェール・コンゴ語族クワ語派）のアサンテ方言（Asante）とファンテ方言（Fante）¹およびンゼマ語（Nzema: ニジェール・コンゴ語族クワ語派）²の言語調査を行ってきた。調査のたびに、私は以

©高知大学人文社会科学部 人文社会科学科 国際社会コース

¹ アカン語は、ガーナ南部において800万人ほどの母語話者に話されるガーナ最大の部族語である（Lewis ed. 2009）。9方言に下位分類されるが、ファンテ方言は他方言との差異が最も大きい。また、方言間の差異はこの言語の歴史的变化に帰されると考えられる。

² ガーナとコート・ジボワールにまたがる大西洋岸の地域において30万人ほどの話者に使用される（Lewis ed.

上の問題に直面した。おそらく言語調査に携わる人であれば、同じような経験があるのではないだろうか。本稿では、私の経験からいくつかの例を挙げながら、これらの問題について考えてみたい。

2. 言語調査の手順の概要

調査に先立って、まずインフォーマント、つまり調査対象言語の情報提供者を決めなければならない。インフォーマントは、調査対象言語の母語話者、つまり生え抜きでなければならない³。「生え抜き」とは、言語形成期（3, 4歳～思春期を迎えるまでの約10年くらい）を一貫してその土地で過ごし、当該言語をきちんと身につけた人をいう。

調査には、媒介言語が必要である。インフォーマントが日本語を使うことができれば問題はないのだが、未知の言語の調査ではほとんどの場合、第三の言語を介さざるを得ない。例えばサブサハラ・アフリカの場合、公用語である英語やフランス語、あるいは現地地の共通語（例えば東アフリカではスワヒリ語）で調査するということになる。

通常の言語調査は、語彙調査から始まる。何を聞くかは、前もって準備しておいた語彙調査表を使う。代表的なものには東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所発行の『アジア・アフリカ言語調査票 上・下』がある⁴。あるいは先行研究、他の言語用のものを参考にしたりして、その言語に重要な語彙を加えながら作る⁵。「最良の調査表は、調査終了時に完成する」とも言われる（峰岸 2000）。なお、語彙の項目数は、調査期間にもよるが、最低1000項目はあったほうがよい（梶 2007, 湯川 1999）。

言語調査の手順は、おおむね以下のようなものである。インフォーマントと向かい合って座った調査者は、語彙調査表を使って、「頭」を何とつか、「おでこ」を何とつか、というように、1つ1つ聞いていく。インフォーマントが答えると、調査者はその発音を注意深く聞き、自分でそれを正確に真似して発音する。そしてその発音でよいかインフォーマントにチェックさせ、正しいと認められた発音をしているときの自分の発音器官の感覚的な観察（内省）を通して、記号や用語で記録する（中川 [J] 1996）。なお、発音を観察し、正確に真似して記述するという一連の作業のために、調査者にはある程度の音声学の知識が求められる。

語彙調査というのは、単なる語彙項目だけの調査ではない。それは同時に、音韻の調査であり、文法事項の調査でもある（梶 2007: 448）。例えば名詞には数や性やクラスの区別があるかもしれないし、動詞は普通は活用形もいくつかは調べるから、例えばテンス・アスペクト・ムードはどのように表すか、主語と動詞との間に照応はあるか、語順はどうかなどということもわかってくる。このように、調査というものは、一通りの語彙調査が終わると、すでにその言語の全体像がある程

2009)。アカン語とりわけファンテ方言の影響を受けているといわれる (Berry 1955: 160)。

³ インフォーマントの条件として他に、発音上の問題がないこと、言語感覚のよい人、語彙も豊富であり、言語表現とそれが意味する事実とを容易に区別することができる人、調査者とのコミュニケーションがなるだけ高いレベルで可能であること、調査者との人間関係が良好になりうる人物であること、などが挙げられる (梶 1980: 20, 中川 [J] 1996: 64, 湯川 1999: 217)。

⁴ 『上』の収容語数は1000語、『下』は2000語。

⁵ また湯川 (1999: 219) は、文法調査にも調査表を使うことを薦めている。文法調査表は、その言語（あるいはそれに近い言語）の先行研究を参考にするか、それが無い場合には、一般的調査表を参考にし、対象言語にあったものを作り上げる。

度分かっているものである (梶 2007, 湯川 1999)。

3. 言語調査における問題

言語調査の手順はおおむね 2. に述べたようになるが、言語調査とは手順にしたがって行えば 1 つ 1 つの事柄が順序よく引き出せるというものではない。言語調査は決して機械的な作業ではなく、その過程でさまざまな困難がある。ここでは、言語調査における 2 つの問題を取り上げる。一つは、未知の言語の調査そのものに伴う困難という問題、もう一つは、言語内の方言的差異や変化に関わる問題である。

3.1 未知の言語の文法をどのように見つけるか

未知の言語の文法はどのように見つけるのか。調査対象言語には、珍しい現象があるかもしれない。ここに、未知の言語の調査の大きな魅力がある。どうすれば効率的に対象言語の重要事項をできるだけ多く探り出せるか。これは、言語調査を行う人が一度は考えることではないだろうか。限られた時間である程度の成果を出さなければならない場合は、なおのことそうだろう。しかし、残念ながら万能の調査法というものはない。理由は 2 つある。1 つは、言語というものは独自の構造を持つため、いかなる側面においても別の言語を参考にした何らかの枠組みや知識で対象言語について理解することはできないということである。もう一つは、梶 (2010: 64) からの引用になるが、「言語と言うのは、音韻論も形態論も統語論も、あらゆることが関係していて、それらが同時に出てくる」ことである。ここでは、私のフィールドでの経験からいくつかの例を挙げて、未知の言語を調査することの難しさについて考えたい。

名詞を収集するときに所有構文も一緒に調べるとするのは、初期調査でおそらく多くの調査者が行うことだろう。ンゼマ語の所有構文には、興味深い現象がある。(1)は「目」の例だが、所有構文では接頭辞と接尾辞が無くなり、さらに所有者が固有名詞のときは *a-* が付く。この *a-* は前部要素末の逆の声調になる。また、語根の声調も変わる。単独形では低声調だった語根が、所有接語を伴う所有構文では高声調になる (- は形態素境界、= は接語境界、` は低声調(L)、´ は高声調(H)を表す)。

- (1) *è-nyì-lè* *è=nyí* *Àkyé à-nyì* *Ákà á-nyì*
 「目」 「あなたの目」 「アチェの目」 「アカの目」

所有構文にはもう 1 種類ある。(2)は「布」の例である。まず、所有接語が違う(「目」は *ε=*、「布」は *w=* を取る。なお、違うのは 2 人称単数所有接語と 3 人称単数所有接語だけで、他は同じ)。所有構文でも接頭辞と接尾辞は無くならない。また声調の現れ方にも違いがある。所有接語を伴う所有構文で接頭辞の声調が H になるが、語根の声調は変わらない。固有名詞を伴う所有構文では接頭辞が前部要素末の逆声調になる。

- (2) *è-dàn-lé* *wò=é-dàn-lé* *Àkyé è-dàn-lé* *Ákà é-dàn-lé*
 「布」 「あなたの布」 「アチェの布」 「アカの布」

所有構文の形式の違いは、被所有名詞の意味的な違いが現れたものである。(1)の形式を取るのは、生まれながらにして持っており、他人から手に入れたり人に譲ったりできないものを表す語(不可譲渡名詞)で、(2)の形式を取るのは、自由に他人から手に入れたり人に譲ったりできるものを表す語(可譲渡名詞)である⁶。

さて、上記の区別は、名詞の単独の形だけではわからず、所有構文を調べて初めてこういった区別があると分かる。また、所有者を表す要素が固有名詞か所有接語かでマーカが異なるということや、固有名詞の声調によって所有マーカや接頭辞の声調が変わるということも、これらの環境を調べて初めて分かることである。そしてこの現象には、音韻論、語彙論だけでなく、形態論、統語論、意味論すべてが関わっている。

もちろん、多くの調査者は、名詞を調べるときに所有構文も一緒に調べるだろう。したがって、上記の事柄は、通常の調査の過程で得られる種類のものかもしれない。一方、通常の調査では発見しにくい現象もある。

次はアカン語アサンテ方言の例である。アカン語の基本語順は(3)のようにSVOである(ここでは声調記号は省略する)。

- (3) *O=fua* *sika*.
 彼は = 握る お金
 「彼はお金を握っている」

ところが、(3)は(4)のようにも言えることが分かった。

- (4) *Sika* *fua=nu*.
 お金 握る = 彼を

(3)と(4)は、動詞の形は変わらず、他の要素が加わることもなく、主語と目的語の位置が交替している。調べてみると、同じような構文交替が(5)~(8)のようにいくつか見つかった。それぞれ左段も右段も意味はほぼ同じである。

- (5) *Fufu* *a-hia=nu*. *ɔ=a-hia* *fufu*.
 フフ⁷ 完了-つまる = 彼を 彼は = 完了-つまる フフ
 「彼はフフがつまった」

⁶ WALIS (The World Atlas of Language Structures) によると、所有構文において可譲渡/不可譲渡名詞の対立を持つ言語は、ユーラシア大陸をのぞくあらゆる地域によく見られるという (Nichols and Bickel 2013)。具体的には、不可譲渡名詞が表すものは、主として、親族、身体部位や位置関係など、所有者との関係を切り離すことができない。私の調査では、ンゼマ語には「目」と同じ所有構文の形を取る名詞として、身体部位と親族を表す36語が見つかった。なお、ほとんどの言語では不可譲渡名詞の所有構文の方が所有マーカが単純であり (Nichols 1988 : 564. また多くの場合、単に所有者名詞と被所有名詞を並列させる)、ンゼマ語のように複雑なマーカで表す言語は珍しいと考えられる。

⁷ プランテンやヤムイモを茹でて搗いた餅状の主食。

- (6) $\text{C} = a\text{-ti}$ *mfifire.* *Mfifire* $a\text{-ti} = nu.$
 彼は = 完了 - 流す 汗 汗 完了 - 流す = 彼を
 「彼は汗を流した」
- (7) *Nsuo* *fri* $nu = hwnu = mu.$ $Ni = hwnu = mu$ *fri* *nsuo.*
 水 ~から出る 彼の = 鼻 = 中 彼の = 鼻 = 中 ~から出る 水
 「鼻水が彼の鼻から出る」
- (8) *Aduani* $a\text{-so}$ $nu = ani.$ $Ni = ani$ $a\text{-so}$ *aduanu.*
 食事 完了 - 灯す 彼の = 目 彼の = 目 完了 - 灯す 食事
 「彼は食事に満足している」

この現象に関わるデータを集めるのは、先の例のような単純な手順ではいかない。どのような場合に交替が可能かは、動詞だけでなく、主語、目的語になる名詞との意味的關係も関わるからである。このように意味や用法が関わる場合などには、言語学の知識や情報を駆使してその現象についてさらに詳しく調べる必要がある。

3.2 「純粹」な話者を求めて

インフォーマントは、できるだけ調査対象言語の「純粹」な話者であるのが望ましい。他の言語や方言からの影響はできるだけ避けなければならない。とりわけ初期調査では、異質な要素が混入していても分からないので、分析に支障が出る恐れがある。第一条件として母語話者をインフォーマントにするのは、そのためである。しかし、母語話者は「純粹」な話者と言えるだろうか。そもそも「純粹」な話者などありえるだろうか。

サブサハラ・アフリカのような多言語社会では、日常的に複数の言語を使う人が少なくない。人によっては母語よりも共通語や公用語の方ができることもある。そうでなくとも多言語地域では、互いの言語が影響を及ぼしあう。異なる言語話者が集まる都市部ではとりわけそうである。また、多くのアフリカ諸語のように標準語や書記言語を持たない言語は、多様な地域、社会的方言を持つし、変化するスピードもはやい。

私がガーナ、セントラル州の大西洋沿岸部にあるアノマボという村で、アカン語ファンテ方言の調査をしているときのことである。インフォーマントはエボさんという生え抜きの50歳代男性である。語彙調査は動詞まで進み、私は不定形だけでなくいくつかの活用形も併せて調べていた。この言語は多くのアフリカ諸語と同じく声調言語であるが、声調が語彙的な区別だけでなく文法的な区別の機能も果たす。動詞のテンス・アスペクト・ムードは接辞によって表されるものもあるが、声調だけで表されるものもある。活用が声調で表される場合、動詞語根の音節構造によっていくつかの声調パターンがある。調査の過程で、エボさんの声調の現れ方が規則性から外れることがあること、その上、1回目と2回目とで異なる声調で発音することがあるのが気になっていた。あるとき、そばにいたホテルのマネージャー(40歳代)と、大学を卒業して就職活動中の若者(20歳代)の二人にも同じ活用形を発音してもらって驚いた。3人とも、声調の現れ方が違っていたのである。インフォーマントのエボさんはさまざまなビジネスを手がける多忙な人で、アクラやクマシなどの主要

都市を頻繁に行き来していた。彼は生え抜きではあったが、おそらくさまざまなアカン語方言話者との接触によって、彼の話す言葉には、「純粋」でない要素が少なからず混じっていたのである。一方、大学出の若者が発音してみせたのは、セントラル州の州都ケーブ・コーストで話される方言の声調であった。実は彼は、エボさんやマネージャーが話す「年寄り臭い」発音を馬鹿にしているところがあった（本人が私にそう言った）。彼にとって洗練された言葉とは、アノマボから見て都会のケーブ・コーストで話される言葉である。意識的か無意識的かはわからないが、彼は「都会的な」発音をして見せたのである。後日、ケーブ・コースト大学の先生にこの話をしたところ、ケーブ・コーストの方言に影響を受ける若者は多いということであった。このように、生活様式、交友関係や都会志向など社会言語学的な要因で言語に「不純」な要素が混じることもある。

次も、言語に対する意識がその人の発音に影響を及ぼす例である。同じくアカン語ファンテ方言の語彙調査を、エドゥクマさんという別のインフォーマントを相手に行っていたときのことである。エドゥクマさんも50歳代の男性で、住んでいる場所もエボさんのところから徒歩で10分ほどしか離れていなかった。彼は村のサブ・チーフを務めていたが、漁師を生業としていた。アノマボでは、漁業に携わる人々は、海岸線を埋めつくす粗末な家屋に住んでいる。漁師は手製のカヌーをこいで漁に出、彼らが消費する分を除くわずかな魚を売って、ぎりぎりの生活をしている。内陸部に暮らす主に農業や商売に従事する人々は、海辺の人々とはほとんど接触がない（ちなみに私たちのように、海水浴やビーチを散歩したり海を眺めたりなどということはない）。そして、彼らは粗野な漁師の話す言葉を見下している。

エドゥクマさんとエボさんとは異なる発音が見られた。(9)のように、エボさんの *Caw* (C は子音) がエドゥクマさんでは *Caa* になるのである (!' はダウンステップ H⁸を表す)。

(9) エドゥクマさん	エボさん	
<i>kákáá</i>	<i>kákáw</i>	「歯痛」
<i>àdàdàá</i>	<i>àdàdàw</i>	「あご」
<i>ikáá</i>	<i>ikáw</i>	「借金」
<i>yàfùnùyáá</i>	<i>yàfùnùyáw</i>	「腹痛」

Caa は、アノマボでは漁師の典型的な発音特徴と見なされている（なお、エボさんの話すバリエーションにおいても *Caa* はある。*àkòdàá* 「老人」、*ìbáá* 「女性」など）。しかし、エボさんは *yàfùnùyáá* とは絶対に言わないと言いながら、私が観察していると会話の中で *yàfùnùyáá* と言うこともあった。ここで問題は、*Caa* が「劣った」発音とみなされていることである。そのために、本当は *Caa* なのに過剰修正で起こっている *Caw* もあるのではないか。エボさんだけでなくエドゥクマさんにも同じことは起こりうる。エドゥクマさんは、「頭痛」、「心痛」はそれぞれエボさんと同じ *ìsiyááw*, *àkòmàyááw* と答えている (*yááw*~*yáá* 「病気」)。いずれにしても、あるバリエーションに対する評価的な態度があるとき、言語を「純粋」な形で捕らえることは難しくなる。

言語は時の流れとともに変化していくという側面もある。書き言葉や標準語を持たない言語であれば、一世代で変化することもある。最後は、ンゼマ語の例である。インフォーマントは、アカさんという生え抜きの50歳代の女性である。3.1で述べたように、ンゼマ語には可譲渡名詞、不可譲

⁸ ダウンステップHとは、Hの後ろにのみ現れるやや低いHである。

しいというよりも不可能でさえある。生まれ育った土地から一歩も出ることなく、いかなる他言語、他方言話者とも接触したことがない人など、現実的にありえないからである。少数言語や危機言語など、他言語、他方言の影響を受けていることを前提として調査しなければならない場合もある。調査者は、職業や交友関係、生活様式、他地域での滞在、居住歴、学歴、言語意識、都会志向など、言語に影響を及ぼしうるさまざまな要素があるということに気をつけて調査にかからなければならない。

4. おわりに

本稿では、言語調査における2つの問題、すなわち独自の構造を持つ未知の言語を調査すること自体に伴う困難という問題と、言語内の方言的差異や変化に関わる問題を取り上げた。言語調査には一般的な手順はあるが、あらゆる言語のあらゆる重要事項を引き出す万能の方法などというものはない。ある重要な現象が偶然発見されることもある。また、調査対象言語には、地域的、社会的方言要素が混じっているかもしれないし、通時の変化が絡んでいるかもしれない。どのようなインフォーマントとめぐり合えるかは運によるところも大きいですが、言語に影響を及ぼす諸要因の存在には注意しなければならない。

以上を踏まえた上で、言語調査に最も必要なことは何か。それは結局、言語研究において基本的な姿勢、すなわち、既知の言語の枠組みや先入観を捨てて対象言語に向き合い、あらゆる言語学の知識、情報をもってその言語を解明しようとする姿勢ではないだろうか。また、言語調査は、やってみないと分からないことが多い。したがってあとは、とにかく調査に取り組んでみるのではないだろうか。

参考文献

- 青木晴夫(1998)『滅びゆくことばを追って—インディアン文化への挽歌』, 岩波書店。
 アジア・アフリカ言語文化研究所(1996-7)『アジア・アフリカ言語調査票 上・下』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
 エヴェレット, ダニエル・L. (2012)『ピダハン—「言語本能」を超える文化と世界観』(屋代道子訳), みすず書房。
 江川清(1985)「言語調査法の特徴と問題点」, 『行動計量学』13(1), pp. 58-64。
 梶茂樹(1980)「言語と現実: アフリカでの言語調査から」, 『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』38, pp. 20-25。
 ——(1993)『アフリカをフィールドワークする』, 大修館書店。
 ——(2002)「未知の言語の文法を探り出す手がかり」, 『月刊言語』vol. 31, no. 4, pp. 38-43。
 ——(2004)「アフリカ言語調査雑感」, 『アフリカ文学研究』no. 32, pp. 17-20。
 ——(2005)「フィールドワークで作る辞書」, 影山太郎編『レキシコンフォーラム』No. 1, ひつじ書房, pp. 1-10。
 ——(2007)「言語調査法」, 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 三省堂, pp. 444-449。
 ——(2010)「未知の言語の調査法」, 『日本語学』vol. 29-12, pp. 58-66。
 呉人徳司, 呉人恵(2014)『探検言語学—ことばの森に分け入る』, 北海道大学出版会。
 渋谷勝己(1997)「足で学ぶ言語研究—フィールド言語学」, 『月刊言語』vol. 26, no. 5, pp. 32-37。
 中川裕 [J] (1996)「フィールドワークのための音声学」, 宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』(第3章), 世界思想社, pp. 62-94。

- 中川裕 [S] (1995) 『アイヌ語をフィールドワークする』, 大修館書店.
- 峰岸真琴 (1991) 「語彙調査表の再構成について」, 『辞書編纂』 3, pp. 11-58.
- (2000) 「『言語調査表2000年版』の公開」, http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm
- 湯川恭敏 (1978) 「バントゥ諸語文法調査票試案」, 『アジア・アフリカ文法研究』 6, pp. 211-218.
- (1979) 「バントゥ諸語語彙調査票試案」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』 17, pp. 139-212.
- (1999) 『言語学』, ひつじ書房.
- Berry, J. (1955) “Some notes on the phonology of the Nzema and Ahanta dialects,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 17, pp. 160-165.
- Lewis, M.P. ed. (2009) *Ethnologue: Languages of the World, 16th Edition*. Dallas, Tex.: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com/>
- Nichols, J. (1988) “On alienable and inalienable possession,” W. Whitley ed., *In honor of Mary Haas*, Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 557-609.
- Nichols, J. and B.Bickel (2013) “Possessive Classification,” M.S. Dryer and M. Haspelmath eds., *The World Atlas of Language Structures Online*, <http://wals.info/chapter/59>

